子ども主体による「使われる公園」に向けた展開と効果
―富山県舟橋村園むすびプロジェクトを中心に―

Development and Effectiveness of a Child-Oriented “Park to Be Used”
-Focusing on ENMUSUBI PROJECT in Funabashi Village, Toyama Prefecture-

文化政策論／論文

地域キュレーションコース
今井　萌恵
Moe Imai

◉はじめに

近年、子どもの遊び環境は大きく変化している。特に大きな変化は、屋外の遊び環境である。近隣に都市公園があるのにも関わらず、屋外で遊ぶ機会が減少している。そのような中で、公共空間の整備や維持管理等を地域住民が主体的に行う事例が増加している。2003（平成15）年には地方自治法改正により指定管理者制度が導入されるなど、民間の力の活用や官民連携の運営が推奨されるようになった。それにより、住民目線での意見の反映や、都市公園の管理運営の効率化に加え、アクティビティの強化、コミュニティ構築などに公園の利用が拡大し、地域の魅力向上に寄与している。

富山県舟橋村でも、行政と住民とが協働し、「舟橋村園むすびプロジェクト」が行われている。園むすびプロジェクトでは、こども公園部長と呼ばれる子どものリーダーが中心となり公園づくりに関与している点で、子ども主体の公園運営という独自性を持つ。子どもたちは、会議にて公園でやりたいことを話し合い、月に一度開催するイベントの内容を決定する。当日はイベントに参加するだけでなく、受付や取材対応の役割も担う。

本研究では、この舟橋村の事例から子ども主体の公園運営が地域に与える影響を、教育的効果と社会的効果（地域への影響）の２つの観点から検討し、明らかにすることを試みた。

◉教育的効果

子どもにとって、園むすびプロジェクトでは学校外での学びを得られる。保護者アンケートの結果から、園むすびプロジェクトの活動は「思いやり」、「興味関心」、「想像力」、「積極性」の４つの力に良い影響を与えることが明らかとなった。こども公園部長は活動を通して老若男女問わず多くの人と交流する。会議では他の学年の子どもと協力し、考えを集約しなければならない。多くの人との関わり合いにより、他者を思いやる気持ちを育む。また、「やりたいこと」を探求し、参加者を楽しませる方法を想像しながらイベントの企画や遊具の考案を行う。それにより「興味関心」、「想像力」が培われる。こども公園部長は人の前に出る機会が多く存在する。会議でのプレゼンテーションやＰＲ活動等である。活動から充実感や満足感を得るとともに、それらにより「積極性」が育まれていると推測する。こども公園部長の活動を経験した子どもたちが培ったこれらの力は、地域で活動する際に役立っている。卒業生が公園での活動を提案しているように、公園をフィールドに今後さらに活発な地域活動が繰り広げられていくだろう。

◉社会的効果

第一に、公園や地域に対する愛着が醸成される。調査を行ったこども公園部長、保護者、参加者の全ての属性で公園や地域に対する愛着が確認された。特に、こども公園部長は活動を継続する中で、「公園を自分の手で作っている」、「地域のために活動している」という意識が芽生え、愛着に寄与すると考察する。また、活動によって地域の魅力を再確認できたり、新たに魅力が創出されたりすることで、地域への愛着に繋がるのだと考える。

第二に、地域に子どもを中心とした繋がりが生じる。子どもの主体性が保護者、地域住民にも波及する。大人は子どもが頑張る姿に影響を受け、活動に参加・協力している。また、活動を通して、園むすびプロジェクトは保護者同士の交流の場、子どもと大人の異世代間交流の場となっていることが確認された。

第三に、公園が地域活動の場へ発展する。地域住民は、園むすびプロジェクトに対して活動の意義を見出し、自身の居場所として受け入れている。また、近年では触発された他の団体と繋がるなど新たな地域活動への可能性が芽生え始めている。

◉まとめ

子ども主体による公園運営は、公園・地域に対する愛着醸成、子どもを中心としたネットワークの形成、地域活動の場づくりに寄与し、公園の日常的な利用促進に繋がる。都市公園が遊び場として機能することで、子どもたちは心身の発達が促進され、地域はより創造的に発展するだろう。

図１　園むすびプロジェクトメンバー（提供：NPO法人園むすびプロジェクト）